

「チーム学校」体制に応じた教育者養成におけるカリキュラムに関する調査」に関連するレポート

東洋大学

中西 史

調査1 川越キャンパスの教職課程の状況を中心に

回答協力者: 理工学部 機械工学科 (教職センター副センター長) 大辻 永 教授(質問紙調査回答者)

日時: 2020年2月5日 14:30~15:30

場所: 羽田空港国際ターミナル ロビー

大辻先生には韓国での学会への出発の際にインタビューの時間を取っていただいた。インタビューの概要は以下の通りである。

川越キャンパスは、事務部、教員組織、教職支援室の関係がとても良いので、教員養成は比較的うまくまわっているという印象だ。受験生の人気はここ数年上昇してきて、少しずつ内部のシステムを変えないと対応できなくなっていると思う。教職課程の必修である授業を受講する学生は1年生では90名程度だが、4年次で教育実習を行い免許(中・高)を取る人数は40名程度である。2年次から教職履修費(3万円)がかかるため、一挙に減少する。

「チーム学校」や教育支援・協働に関しては重要なことだと思うが、川越キャンパスの教職課程での具体的な取り組みは無い。教職センター(2017年7月設置)では4つの各キャンパスに教職支援室を設け、退職校長等が相談員となっている。川越キャンパスでは相談員がコーディネーターとなって中学校の定期試験前に学生がボランティアとして学習支援に入り、その学校の校長が教職実践演習の講師になる、といった関係づくりができています。そのような体験を通じて、学生はある程度「チーム学校」体制の理解もできていると考えている。

後日大辻先生から提供いただいた資料によると、教職課程を履修する1,2年生を対象に授業外で行っている長瀬巡検では、埼玉県立自然の博物館前館長の本間岳史先生、秩父農工科学高等学校元校長の野澤雅美先生など、大学外の機関・人材からの支援を受けており、教育支援・協働の学びにもなっていると考えられる。

大辻先生曰く「他のキャンパスの具体的な取り組みは分からない」とのことであったため、白山キャンパスの教員に改めて調査協力を依頼することとした。

調査2 白山キャンパスの教職課程の状況を中心に

回答協力者: 文学部 教育学科 榎本 淳子 教授

日時: 2020年2月13日 (メールでのご回答)

東京学芸大学 附属竹早中学校から東洋大学 文学部 教育学科に転出された鈴木一成先生のご紹介で、榎本先生にご協力いただけることとなった。質問内容と先行の報告レポートをお送りしたところ、入試業務でお忙しい中、下記のような回答をメールで送って下さった。非常に端的にまとめていただいたため、そのまま掲載させていただく。

金沢学院大学は、とても熱心に取り組んでおられて感心するとともに羨ましく思いました。

1. 「チーム学校」に対応した教員の資質能力育成に対する取り組みについて

東洋大学の教職課程は、文科省が定めている科目を最低限で設定していて、「チーム学校」に対応した教員の資質能力育成に対する取り組みは、やっていないです。

授業としては、調べてみると「教職概論」という授業で、少しだけ触れているような感じですが(シラバスを見ると授業の最終回で「学校が「チーム」として機能する意味」という記載があるので)、他はありません。

もちろん、「教育相談」等の授業は設定があります。資格として「学校図書館司書教諭」「図書館司書」「社会教育主事」は取得できますので、そこで教育支援職や地域住民との協働に関して学んでいるかもしれません。

全体には成蹊大学と状況が似ているかもしれません。東洋大学の教員免許状の取得状況について資料を添付致します。私が回答したのは、「白山キャンパス」の状況なのですが、実際には、白山キャンパスの教育学科は、教育学科の専門科目として設定されている科目が教職科目の単位として認められているものが多く、他学科とは動きが異なります。また、教育学科独自に「カウンセリングの理論と方法」「教育の現代的課題」などの科目がありますので、そこで少し、「チーム学校」のおとや教育支援職や地域住民等との協働を前提とした職能形成について学べるかもしれません。

しかしいずれにしても、東洋大学は新しい動きについていけないように思います。

2. 教育支援職を目指す学生と教職課程の学生が、一緒に教育について考えるような授業や場

教育支援職というと、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、部活動指導員、学校司書教諭などになりますでしょうか。

学校司書教諭以外は、東洋大学内に資格を取れる課程をもっていないので、これらの学生と一緒に教育について考える授業や場はもっていません。白山キャンパスでは、社会心理学科が公認心理師の資格が取得できるように(おそらく今年度から)なりましたので、そういった資格の取得を目指す学生と、教員を目指す学生と一緒に勉強できる授業などを設定すると面白いだろうと思いました(社会福祉学科も何かしら「教育支援職」に関わることを学んでいるのかもしれませんが、東洋大学はそういったことを学科を超えて連携するシステムを持っていません。まずは学科を超えて連携することから始めないといけないかもしれません。教職課程でも、もう少し幅広く学べる機会を増やすべきですね。「教職実践演習」で組み込めるかもしれません)。

3. 個人的な感想として

今まで「教育支援職」ということをほとんど意識していませんでした。それを改めて反省するとともに、「チーム学校」が今後求められるとして、大学教育としても「チーム」とは何か、「教育支援職」のそれぞれの専門性とは何か、ということを学生が学ぶ機会を提供する必要があると思いました。単純に私も「学校図書館司書」や「スクールソーシャルワーカー」が具体的にどのようなことをしているのかを知りません。

私はスクールカウンセラーを12年ほどやっていたのですが、勤務を始めたのが1998年で、その時はまだまだ学校がカウンセラーを受け入れるのに慣れていなくて、「学校に入って行く」ことに随分と壁があったことを思い出します。ただ、学校の先生方と直接「連携」しながら生徒を支援できることは、外部の相談機関で子どもを支援するのとは異なって、役割を分けて多方面から支援できること、当該生徒に関する情報が多いことなど、独特の良さがありました。

いただいた資料から、2018年度の教育実習終了者数は、

- 中学校・高等学校 白山キャンパス 256名、白山キャンパス通信教育課程 9名、川越キャンパス 45名、朝霞キャンパス6名、板倉キャンパス 41名
- 特別支援学校 47名
- 幼稚園 89名
- 養護 15名
- 小学校 42名
- 栄養 4名

であった。

調査1・2の考察とまとめ

ここまで2名の先生から東洋大学の川越キャンパス、白山キャンパスの教職課程における教育支援・協働に関する学びについて率直なご意見をいただくことができた。東洋大学は教職課程を置く4つのキャンパスを保有しているが、上記の教育実習終了者のデータから同大学の教職課程の主要な部分に関する状況は把握できたと思われる。

東洋大学では教職課程のカリキュラムで「チーム学校」に関する学びの議論はこれからのようであるが、同大学のホームページから「教職ガイドブック 2019」をダウンロードし確認したところ、ボランティア活動を積極的に奨励していた。上記のガイドブックには、

文部科学省は、学校で体験的な活動を行うことを次のように述べています。

「(学校体験活動は)教員を目指す学生に、理論と実践の往還により、教員として必要な実践力の基礎を身に付けさせるとともに、学生が、学校におけるさまざまな体験を通じて自らの教員としての適格性を把握するための機会となる」

といった引用や、

「サービス・ラーニング(他人への支援を通じて学びを得る)」と考えると考えると一歩を踏み出しやすいかもしれません。学校・教育の現場を知ることは仕事研究につながります。自分が目指す教職について、在学中から積極的に学んでいきましょう。

といった教職に関する学びの位置付けに関する記述があった。また、各キャンパスの教職支援室の紹介の中でもボランティアに関する記述があり、特に川越キャンパスのものは、

【学習ボランティアについて】

教職支援室では、学生が小学校、中学校、高等学校、特別支援学校等で学習ボランティアを行うことを勧めています。学習ボランティアでは、学校現場で、先生としての学習指導、放課後指導等を通して先生の仕事を体験します。学生は、川越市スクールインターンシップ、埼玉県立高等学校学習サポーター、アスポート学習支援等に参加しています。教職支援室では、大学や自宅に近い学校で学生が実施できるように一人ひとりの状況に合うマッチングを行っています。学生は、生徒から「先生」と呼ばれ、教師になる意欲が高まったとの声や、採用試験の面接では学習ボランティア体験について質問されたとの報告があります。

と項目を立てて具体的な紹介を行い、学習ボランティア体験報告会の写真を添えていた。

大辻先生によると、学習ボランティアにおいて「チーム学校」や教育支援・協働に関する学びの場を意図的にコーディネートすることは現在まではしていないそうであるが、それが実現できれば多くの大学においても有効な学びの手段となりうるであろう。また、スクールカウンセラーの経験をもつ榎本先生の上記の

学校の先生方と直接「連携」しながら生徒を支援できることは、外部の相談機関で子どもを支援するのは異なって、役割を分けて多方面から支援できること、当該生徒に関する情報が多いことなど、独特の良さがありました。

というコメントは、私自身の学びになった。このようなセンスをもつ教員の授業においては、カリキュラムやシラバ

スに顕在化していなくとも学生は教育支援・協働について考える機会を得ているのでは無いだろうか。今後このような観点からの調査を行うとともに、カリキュラムを提案することも意義のあることと考える。また、複数のキャンパスを有する大学における教職過程の在り方も一考の余地があるであろう。

調査3 追加調査（期間: 2020年3月）

前ページまでの原稿を協力者にお送りしたところ、追加の情報をいただき、それに基づく意見交換を何度か行わせていただいた。

・榎本淳子先生から 複数キャンパスにおける教職課程の運営の難しさと可能性

4つのキャンパスは、取得可能な免許種(教科も含む)が異なっています。さらにキャンパスの設置場所が、東京都、埼玉県、群馬県と異なるため、教育委員会との連携の考え方、ボランティアのあり方も異なっているように思います。さらにいえば、東洋大学は専任教員が複数のキャンパスで授業を持つことはない(2005年度まではキャンパスを跨がって勤務していたのですが、キャンパス間が離れていることもあって現在はそのような勤務形態はありません)、各教員は他キャンパスのことはほとんど分かっていないと思います。ただ、2017年7月より「教職センター」が設置され、そこには各キャンパスから副センター長が選出され、1ヶ月に1度会議が持たれるようになったので以前より他キャンパスの状況は分かるようになりました。会議は基本的には白山キャンパスで行い、白山まで来ることができない場合は、Webで繋いでいます。キャンパスが複数に別れる場合、足並みを揃えて進めることは難しいように思いますが、定期的な会議を持つことで随分と分かるようにはなりません。それは「大枠は足並みを揃え」、「互いに理解する」ということになるかと思いますが、細かいところは同じではなく、特にボランティア活動などは、地域や免許種によってかなり違いがあります(朝霞キャンパスに、体育教諭になる課程があつて、そこでは地域の子どもとスポーツ指導員のようなボランティアをしているようです。朝霞キャンパスは幼稚園教諭の免許、養護教諭免許、体育教諭免許など、少しバラエティに富んでいます)。東洋大学の「教職課程」は、教職センターができて今まさに、全体に動き出した状態です。白山キャンパスでは今後、学生が現場に出ていく機会を増やしていきたいと考えています(学校体験学習の単位化)。

・鈴木一成先生から 初等教育専攻における往還実習の現状と可能性

教育学科初等教育専攻では学生が4年間同じ小学校で実習を行うよう、1年次から往還実習にとりくみます(実習日誌も作成します)。2-3年の往還実習では週に一度、大学でも対応した授業(初等教育実践研究AA・AB、BA・BB:それぞれ半期)があります。

実際には小学校ごとに実習の状況は様々です。例えば、2-3年の往還実習では同学年に1年間所属することもあれば、1~6年をローテーションして所属することがあるようです。また、学生が放課後の指導にも参加することもあります。各学年における取り組みは以下の通りです。

1年次…観察実習、3日間で小学校の教育活動について参与する。(主に1~3月です、学大のF類で行っていた実習と同じような感じです)

2年次…往還実習、週に一回(水曜日)、実際に教育活動に参加する。授業はメインではなく補助として入る場合が多い。

3年次…往還実習+集中実習、週に一回(金曜日)、実際に教育活動に参加する。集中実習は主として5日間連続で実習を行い、実際に授業等もメインで受け持つ。

4年次…教育実習、これは通常の教育実習です。学大のように選択実習はありません(免許が小学校のみのため)。

チーム学という場面に注意して manaba(別紙 資料1 マナバフォリオ)をもう一度見たところ、基本的には授業、行事(運動会とか学芸会)、子どもの指導に関することが中心でした。担任以外で記述があったのは、英語の授業で担任の他に入った ALT の先生、あるいは JICA の外部講師に関する記述が少しあったくらいでした(この時も基本的には担任の先生が指導しています)。学生の記述した manaba を読んで、想像以上に SC や養護教諭の記述がないことに気が付きましたので新たな課題であると認識しました。「チーム学校」体制に関する学びに関する現状は、子供の対応に際して、カウンセラーや養護教諭と関係していることもあるようですが(例えばケガした児童を養護教諭へ連れていく等)、基本的には授業、行事(運動会とか学芸会)、子どもの指導に関することが中心であるようです。学生は、眼前の授業と子供の指導をどうするかについて学ぶことで手いっぱいになっているようです。2-3 年生なので、まだ「チーム学校」のように教育活動を俯瞰的に見ることができているのかもしれませんが。

チーム学校の意識が出てくるのは、担任や保護者と深くかかわったときかとは思いますが、ただ、自分自身も中学校にいた時に、カウンセラーや養護教諭との連携は当たり前だと思っていたことですので、学生にもその感覚を多少は伝えられると良いと感じたところです。

・ 今後の可能性

往還実習では、学生は主として授業や子供の指導といった教育活動を学んでいたように思います。4 年次の教育実習においては、授業や子供の指導をさらに拡張して、実際に養護教諭やスクールカウンセラー等の関わりを持つようなチーム学校としての理解を深めていくことを期待しています。具体的には、教育実習において行われる養護教諭の指導や、スクールカウンセラーの指導等を、往還実習を通して経験した様々な事例と結び付けて、それらを深く理解し、次の教育活動へつなげていくことが望まれます。

全体の考察とまとめ

複数のキャンパスを有する大学における教職過程の在り方に関し、榎本先生から東洋大学の現状と課題、課題に対する取り組みを具体的にお示しいただいた。距離的な問題だけでなく、免許種や教育委員会の対応の違いを背景とした共通認識の形成の難しさは想像できない課題であった。それらのハードルを超えて、教職課程の充実に取り組まれている先生方に頭がさがる思いである。その一方、あるキャンパスでの優れた取り組み(教育委員会、学校との連携等)を他のキャンパスの教員が知ることで、都や県の垣根を越えた教員養成の充実、更には大学の垣根を越えて広げることができると感じた。

往還実習に関しては、榎本先生から「鈴木先生が主担当となっている往還実習の中で、チーム学校体制に関する学びの可能性があるので」とご意見をいただき、鈴木先生にまとめていただいた。学生の Web サイト上の記述を改めて振り返っていただくという大変なご苦勞をおかけした。「想像以上に SC や養護教諭の記述がないことに気が付きました」とのことであるが、その現状は本学や多くの大学の教育実習でも同様と想像できる。実習校において、学内外の連携は多かれ少なかれ行われているはずであるが(中には、特筆すべきものもあるであろう)、学生がその重要性を意識化できていないのであろう。「チーム学校体制」についての学びは学校現場でこそ実感できるものである。その意味で、大学の授業で現場を視察したり映像資料を見たりすることも有効であるが、学校現場に学生自身が身を置く実習こそが最大の学びの場であるという、あまりにも当然のことを改めて気づかせていただいた。東洋大学の往還実習であれば、例えば「別紙 資料2」の往還型教育実習・系統表の「ねらい」の「⑤その他の教師の役割」の中に、「保護者との連携」とともに「養護教員をはじめとする他の教員や教育支援者(SC 等)との連携」の項目を加える等の取り組みが考えられる。一般的な教育実習においても、事前・事後指導の中に組み込み実習日誌にもそのような項目を設ける、さらには教育実習の受け入れ校にもその旨を伝え協力を仰ぐ、といったことが可能であろう。今年度から東京学芸大学では教職実践演習に「子どもの貧困」の

内容が加わり、4年生とともにクラス担当教員も外部講師の講話や映像資料を視聴させていただいた。例えばこのような授業を事前の授業の中に組み込み、「連携の効果を高めるために、教師側がどのような知識・考え方を持つことが重要であるか」について学生が考えることは比較的容易であると思われる。私の研究室の4年生(初等教育教員養成課程)に確認したところ、教育実習に向けたこのような取り組みはほとんど無かった(少なくとも意識できなかった)とのことである。児童・生徒のプライバシーに関わる部分もあり、実習校での扱いが難しいことも考えられる。まずはこのあたりの整理が必要であろう。

最後に

鈴木先生からは「今回の調査の中で、実習において「チーム学校」についての意識を高めた方が良いという示唆をいただいたように感じております。改めて感謝を申し上げます。こうした実践に即した研究が盛んになって、チーム学校の視点を多くの先生がもたれると良いですね。」という本プロジェクトへのエールをいただきました。

お忙しい中調査にご協力下さりいただき、本プロジェクトにとって重要な示唆を下さいました大辻 永先生、榎本淳子先生、鈴木一成先生、また、往還実習の資料を快く提供くださいましたくださった東洋大学文学部教育学科の先生方に心より感謝いたします。

以上